

ラジオ放送
＜令和5年1月～3月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.442

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 年頭放送 神様とも人とも仲よく page 1
金光教教務総長 岩崎道與
- 長寿のひけつはありません page 5
岡山県・本部在籍 金光英子
- 産んでくれてありがとう page 9
埼玉県・大宮教会 松本尚
- 認知症の義母がくれたもの page 13
福岡県・不知火教会 池本ひろ江
- 私を変えたもの page 18
大阪府・鳳教会 工藤由岐子
- 仕事 page 22
滋賀県・湖北教会 井上宗一
- 神さん助けて下さい（信心ライブ） page 26
- 神心目覚めて（ピックアップ） -介護- page 31
愛媛県・伊予吉田教会 尾崎順子
- 母の笑顔（ピックアップ） -介護- page 35
大阪府・天満教会 森田貴子
- 一生死なない親に巡り合う page 39
兵庫県・香櫨園教会 武部和加子
- いのちの羽ばたき page 43
兵庫県・西宮教会 西村明正
- お祖母ちゃんのソファ page 47
愛知県・牧野教会 服部貴子
- 来年の夏には page 51
福岡県・行橋教会 井手美知雄

《年頭放送》

「神様とも人とも仲よく」

金光教教務総長

岩崎道與いわさきみちよ

皆さま、あけましておめでとうございます。

新型コロナウイルス感染症の終息が見えない状況が続いている中でも、このように新しい年を迎えられたことを、まずはお喜び申し上げます。

さて、これは金光教のある先生から聞いたお話です。家族の間でいつも争い事が絶えない家がありました。その隣には、家族が仲良く暮らして笑顔が絶えない家がありました。争いが絶えない家の奥さんが、仲良し家族の奥さんに聞きました。

「お宅はいつも仲良しでいいわね。それに比べて、うちは争い事が多くつて、やんなっちゃうわ。どうしたらお宅のように仲の良い家族になれるのかしら。何か秘訣があったら教えてほしいわ」

すると隣の奥さんはこう答えました。「秘訣なんてないわよ。でも、強いて言えば、うちはみんな悪い人だから、うまくいくのかもしれないわね」

「えっ、みんなが悪い人だからうまくいって、どういうこと？」

皆さんも、どういうことか分かりますか？「みんなが悪い人」だから家族が仲良くいく。どういうことなのでしょうね。

隣の奥さんが続けて次のような話をしてくれ

ました。

「そうねえ。この間もこんなことがあったの。

夫が茶の間で新聞を読んでいたの。そこに私が、

『はい、お茶をどうぞ』って、テーブルの隅に

湯飲みを置いたの。主人は新聞に目をやったま

ま『んっ』と生返事をしただけ。そこへ3歳に

なる孫が走ってきて、勢い余ってテーブルにぶ

つかったら、湯飲みが倒れて、熱いお茶がこぼ

れたの。もう少しで孫がお茶をかぶるところだ

ったけど、幸い無事だったの」

「へえ、良かったわね。それで、どうしたの。

悪い人はどこへ行っちゃったの」

「そこなのよ。夫は、『お茶がかからなかつ

たか』と、孫の様子を心配した後、こう言った

の。『ごめんな。ここにお茶を置きっぱなしに

していたおじいちゃんが悪かった』って。それ

で私も、『いえいえ、おばあちゃんがこんな隅

に置いたからいけなかったのね。悪かったわ』

と謝ったの。そしたら嫁が、『ごめんなさい。

食事の支度をしていてちよつと目を離してしま

って』と言ってくれたの。それから嫁が孫に、

『おじいちゃんおばあちゃんに、走ってごめん

なさいって謝りましょ』って言うと、孫が、『ゴ

メンナサイ』ってペコンと頭を下げたの。こう

してみんなが謝り合って、孫が何でもなかった

ことを喜び合ったの」

この話を聞きながら、その奥さん、次のよう

に想像しました。

「うちで同じようなことが起きたらどうだろ

う。夫は、『孫が走り回るの分かっていて、こ

んな所にお茶を置きやがって』と怒鳴るだろう

し、私は私で、『あなたがちゃんと湯飲みを受
け取らないからでしょ』と言いつ返しだろし、

『ここでは走っちゃいけないって、いつも言っ
てるでしょ』と孫を叱って、嫁に孫から目を離

さないようにと注意するだろうし』と。
こう想像しながら、その奥さん、「そうか、

うちではみんなが『私は悪くない。あなたが悪
い』と言い張っていることが多い。だから争い

が絶えないんだ」と気づかされたのでした。
このお話を聞いた時、私も同じだと思いまし

た。自分のところで起こる争いの多くは、「私
は悪くない」「相手が悪い」という捉え方から

起こることがほとんどです。素直に、「すみま
せん」と言えればいいのに、何かが邪魔をして

言えないことがよくあります。

ところで、金光教祖様は、信心をするとい
うのは、神様と仲良くなつていくことだと教えて

くださっています。そして、神様と仲良くなる
ためには、神様とよくお話をすることが大切で

あるとして、そのために3つのことを意識する
ようにと、教えておられます。

その3つとは、お礼とお詫びとお願いです。
この3つを意識しながら神様とお話をしていく

と、神様と心が通い合うようになるとおっし
やっています。

この3つのことは、神様と仲良くなるためだ
けではなく、人と人との間でも大切なことだと

思います。この3つ、「ありがとう」というお
礼と「すみません」というお詫び。そして「お

願います」というお願いが交わされている時には、その間柄は良いものになっているはずです。とりわけ、「すみません」と言えている時には、問題が起こったとしても、大きくならずには、収まっていく場合が多いと思います。

でも、なかなか、「すみません」と素直に言えない私たちです。だからこそ、私はまず神様に向かって、「すみません」と言う「稽古」に取り組んでいます。教会にお参りをして神様とお話していると、不思議と素直に自分のことをそのままに見つめられるようになります。そこから、これまた不思議と素直に、「ありがとうございます」、「よろしくお願いします」、そして「すみませんでした」と、神様に向かって言えるようになってきます。このように、神様

とのお話を通して心を整える稽古を続けることで、いつの間にか、人に向かって、「ありがとう」、「すみません」、「お願いします」と言えるようになってきました。

先行きが見えにくい世の中だと、何かとギスギスした関わり方になりがちです。だからこそ、もしよろしかったら、金光教の教会に足を運んで、神様に向かってお話をする「稽古」をしてみませんか。その稽古を通じて、誰に対しても素直に、「ありがとう」、「すみません」、「お願いします」と言えるようにならせてもらいましょう。

そうやって今年1年、あなたの周りにうれしく、ありがたいことが生まれてくるようにと、お願いさせていただきます。

《先生のおはなし》

「長寿のひけつはありません」

岡山県・本部在籍 金光英子

(ナレーション)

おはようございます。案内役の岩崎弥生いわさきやよいです。

今朝は、岡山県本部在籍・金光英子こんこうひでこさんのお話をお聞きいただきます。タイトルは「長寿のひけつはありません」。

私の母は、昨年3月に99歳、白寿を迎えました。99歳の現在も元気で食事の支度をし、新聞を読み、家族や仲間との会話を楽しんでいきます。

その母は、91歳の時、腰の骨を圧迫骨折し、6カ月間寝たきりになりました。

それまでは、20歳で結婚してからずっと台所に立ち、多くの家族の食事を作り続けてきたのです。私は、おそるおそる食事をベッドに届けました。痛くて困るとか、歩けなくて不自由だとか、どんなつらさを訴える言葉が返ってくるかと内心ドキドキでした。ところが、母の口から出た言葉は、「私は今、ちっともつらくないのよ！」という言葉でした。「え！ どうしてですか？」思わず私は聞き返しました。

すると母は、「91年も生かされてきて、つらいことや難儀なことにはたくさん出遭ってきた。でもね、今はありがたかったこと、楽しかったこと、うれしかったことを思い出しては、『ああ、ありがたかったなあ。楽しかったなあ。うれしかったなあ』と幸せな気持ちで満たされ

ているのよ」と言いました。

母は、庄迫骨折をして痛いはずだし、歩けなくて困っているはずです。何より70年以上もお料理を作り続けている母が、私の料理をなんと判定するかと思っていた私はびっくりすると同時にほっとして、ほっこり温かい思いで心が満たされました。

そんな母は、6カ月の療養期間を終え、「今日から外に出て歩くように」とのお医者様のお言葉に、毎朝の神様へのお参りを再開させたのです。普通に歩けば今までなら10分とかからない距離を30分以上かけて歩きました。大変だったと思うのですが、母は言葉では表せないほどの大喜びのお参りでした。そのようにして毎日喜んでお参りを続けるうち、数カ月で以前の生

活に復活していきました。

このまま寝たきりになっても仕方がなかったのに、普通に毎日台所に立ち、お料理ができるのが本当にありがたいと、喜んで暮らすことができるようになっていきました。「年を取ると、だんだんできることが減っても仕方がないのに、90歳を過ぎても、できることが増えるなんて、恵まれていてありがたい」と言いながら暮らしていきました。復活したての頃は、お鍋やポウルやバットなどの調理器具は、シンクの下に置き、「棚の上には手が届かないので工夫したのよ」などと言っていました。ところが、だんだんお鍋やポウルも少しずつ元の位置に戻っていききました。この年になってもできることが増えるのはうれしいと大喜びです。

このように、できないことを嘆かず、できたことを喜んで日々を過ごし、99歳の誕生日をありがたく迎えたのです。

では、母はこれまでずっと穏やかな人生を過ごしてきたかというと、むしろ長編小説になりそうな激動の人生を送ってきたと言えます。東京のお屋敷のお嬢様として育った母が、結婚と同時に田舎の15人家族のお嫁さんになりました。包丁ひとつ持ったことがなかったのに、飯炊き、風呂焚き、洗濯掃除に子守りの生活に突然なったのです。そして5人の子どもが生まれました。そんな時、夫が早く亡くなってしまうのです。さらに親孝行で優しくった長男が、10年前に亡くなりました。そして7月に長男の10年祭を迎えたのです。

そして集まった、25人の家族に母が、お話をしました。

「生まれて99年、結婚して99年、夫を亡くして44年、息子を亡くして10年、長寿のひけつをよく聞かれます。友人たちの、『長寿には水中ウォークがいいのよ』『磁気ネックレスがいいのよ』などの話を聞きながら、私にはそんな暇もお金もなかったのです。だから、長寿のひけつはありません。しかし、私は、亡くなった夫や息子と共に、1日1日を喜びながら生きています。夫も息子も優しくすてきな家族でしたから、亡くなった2人に毎日手を合わせ、困ったら相談をし、生かされていることを喜びながら暮らしたら、99歳までの命を頂いたので」

母は、今もひ孫たちとラジオ体操をし、お

参りを欠かさず、そして台所に立ち、元気に暮らしています。

(ナレーション)

いかがでしたか。

よく「年を取ってから転んで骨折すると、寝たきりになってしまふよ」と聞きます。ところが、今日のお話では、91歳の時、骨折して、6カ月間寝たきりだった方が、お元気になられ、ラジオ体操をしたり、お参りも欠かさず、また、台所仕事までされていると知り、驚きました。

長寿のひけつが無いと言いながら、何かあるに違いないと思って聴いていますと、いくつかひけつと思えることが見つかりました。それは、困ったことがあっても、ありがたいほう、楽し

いほう、うれしいほうを見ているということ。そして、1日1日を、神様、霊様とお話ししながら、喜んで、朗らかに生きておられること。私も、こんなふうに朗らかな生き方がしたいなあと思います。なにか年を取るのが少し楽しみになるお話でした。

《先生のおはなし》

「産んでくれてありがとう」

埼玉県・大宮教会 松本尚

(ナレーション)

おはようございます。案内役の岩崎いわさき弥生よひです。

今、ラジオから流れてくるお話が、自分のことだったら、この放送のこと、一生記憶として残りますよね。今日は、34年前、母親が自分のことを金光教のラジオ放送で話していたのを聞いた方が、今度は、母親のことをラジオ放送する、ちよつと素敵なお話です。埼玉県大宮教会おおみや・松本尚まつもとたかしさんのお話で、「産んでくれてありがとう」。

私は関東にある金光教の教会で御用させていただきます。ただいています。昨年の6月で62歳になりました。その誕生日の日のことを聞いてください。

誕生日の朝、私は神様に、今まで生かされてきた御礼のお祈りをしていました。62年を振り返っていると、ある思いが湧いてきました。それは、長年にわたって教会長を勤め、8年前に亡くなった父と、90歳で現役の金光教教師である母への思いです。それで、母が元気なうちに「産んでくれてありがとう」と言おうと思ったのです。

なぜそのようなことを思ったのかをお話します。私が28歳の冬のことでした。

私は大学を出てから6年間、大阪の高校で教員をしていました。当時、時々参拝していた金

光教の教会に、久しぶりに参拝しました。先生は温かく迎えてくださり、その日の朝に放送された金光教のラジオ放送を聴かせてくれました。なんと、母が、私の子どもの頃のことを話していました。

私は小学校2年生の時、心臓に穴が開いていると診断されました。「これからは一生、激しい運動をしてはいけない」と医師に言われたのです。

でも私は体を動かすのが好きだったので、水泳や長距離走などの体育の授業を見学する以外は、ソフトボールや缶けりなどで、外を駆け回っていました。両親に「あれをしたらダメ、これをしたらダメ」と言われた記憶がないのです。

その時の思いを、母がラジオでこのように語っていました。

「わが子の健康を願わない親はいません。まして穴の開いた心臓を持った子を抱えていれば、なおさらのことです。でも信仰の世界に生きる私たちは不思議なのです。土壇場にあってもただ恐れおののくばかりでなく、そこから抜け出ることができるようになります。『神様、息子は今夢中でスポーツに挑戦しています。どうぞ彼なりの精いっぱいでの命の燃焼をお見守りください』と祈る中で、息子にブレーキを掛けずに済むのです。もともと活発に動き回る能力は神様から頂いたもので、この子から動くということを取り上げたら、何もなくなってしまう。『神様どうぞ良きようにお導きください』と祈りつ

つ、『あれはダメ、これはダメ』は心の片隅に
追いやって神様に継り続けました」

というのです。

今、私も3人の親とならせていただきました
ので、その時の両親の思いはよく分かります。

子どもには、「1分1秒でも長生きしてほしい」
と思うのが親心です。でも「この子の命が輝け
るように」と、何も言わずに祈ってくれ、見守
ってくれた両親でした。

そして2年後に再検査をした結果、自然に穴
がほとんどふさがっていたのです。私はこのラ
ジオ放送を聞くまで、このことをすっかり忘れ
ていました。

当時の私は、社会人として自分の力で生き、
精神的にも経済的にも自立していると思ってい

ました。でもそれは表面的なことであって、両
親はじめ、たくさんのお祈りがあって私があるの
でした。それに気付いた時、私の進む道は決ま
りました。「教員ももちろん大切な仕事だけ
ど、両親のように人の助かりを祈るお仕事をさ
せていただく」と、金光教教師となり、31年
が過ぎたのです。

さて、誕生日の日は、母に会って最初に「あ
りがとう」を言おうと思いましたが、言えませ
ん。その後1日、2人でドライブを楽しみまし
たが、言えませんでした。

夕方になって実家に戻り、母を降ろして駐車
場から出る時にも、やはり言えませんでした。
車を発車させると、実家の前の横断歩道に人が
見えました。ブレーキを掛けると、助手席のシ

ートの下から、母が忘れた水筒が転がり出てきました。これは、神様が「言いなさい」とおっしゃっているのだと思い、バックして駐車場に戻ると、母はまだそこにいました。車の窓を開けて水筒を渡し、「産んでくれてありがとうございます」と言いました」と言いました。すると耳の遠い母は、「はあ？ なに？」

仕切り直しです。もう1度、ゆっくりと大きな声で、「産んでくれてありがとうございます」と言っていると、はにかんだような笑顔を見せてくれました。

… 帰りの車の中で、もう1度言いました。「産んでくれてありがとう」「祈ってくれてありがとう」「あなたの祈りを引き継いでいきます」

(ナレーション)

いかがでしたか。

子どもは、どうしてもジツとしていられないものです。動き回る尚さんを、お母さんは、さぞかし心配したことでしょう。その心配を祈りにかえて、神様に縋り、見守り続けていたのですね。「産んでくれてありがとう」。なかなか照れくさくて、言えない言葉ですが、これまでの親の恩に感謝するぴったりの言葉だと思います。

今日は、親子の微笑ましい姿が目に見えようなお話でした。

《私からのメッセージ》

「認知症の義母がくれたもの」

福岡県・不知火教会 池本ひろ江

おはようございます。金光教不知火教会で奉仕させていただいている池本ひろ江です。夫と、3人の子どもたちと、認知症の夫の母と、猫のたすくと、すったもんだしながらも、楽しくありがたい日々を送らせてもらっていますが、母との暮らしが楽しいと思えなかった私が、楽しめるようになったきっかけや、母が結んでくれたご縁など、今に至るまでのお話をさせてもらいたいと思います。

「もしかしたら、母は認知症やろうか」と思い始めたのが、2年前の夏頃のことでした。几

帳面で、しつかり者の母が、いつも欠かさな

かった家事をしなくなったり、なまけているように見えることが多くなってきたんです。そんな母の言動がきっかけで、夫とけんかになったり、子どもたちも、母との関わりをめんどくさがるようになっていました。母は、どんどん物忘れはひどくなるし、お風呂は嫌がるし、どうしたらいいのか分からず、頭の中は、先の不安、心配がよぎって、「介護」という言葉が、心に重くのしかかっていました。

「母が一番つらいはず」と頭では理解しても、20年間の同居で積み重なった嫌な出来事が思い出されて、心から支えたいという気持ちにならない自分も嫌でした。私の心の中に湧いてくる不安やどす黒い気持ち、愚痴などを、金光教の

教師でもある実家の母に聞いてもらっていていました。実家の母はいつも最後までじつくり聞いてくれました。「それは、きつかね。私には、何でも話して良かけん、人に求めるのはやめとかね。人じゃなく、神様に頼らんね。神様は、あなたの前になり、後ろになつて、導き、助けてくださいるよ」と話してくれました。その言葉にすがつて、「とりあえず、やってみよう」という気持ちに少しずつなつていきました。

病院に行くと、夫の母は「アルツハイマー型認知症」と診断されました。不安がいよいよ現実のものになりました。その日の夜、以前から相談に乗ってもらっていた介護士をしている先輩に、電話で伝えたくてです。すると、偶然にも用事で私の教会の近くにいて、すぐに駆けつけ

てくれたんです。認知症が進行する上で、これから起きるであろうことや、行政の支援のことなど、丁寧に教えてくれました。夜だったので、家族みんなで話を聞くことができて、私は、この状況を、「神様が用意してくださった！」と感じました。

子どもたちも「おばあちゃんは、病気なんやね。みんな、優しくサポートしていこう」「神タイミングやね。すごいね」と言ってくれて、家族の心を一つにしてもらいました。

ある時は、介護のことで分からないことがあつて、お世話になつている介護士さんに連絡したいなあと思つていると、近所のスーパーでばつたり会い、質問することができたんです。一緒にいた娘も「すごいタイミングやね。神様が

応援してくれよるね！」と、ありがたい思いで帰宅すると、母がお漏らししたんです。私の口から出てきたのは「お母さんごめんね！『トイレどう？』って聞けば良かったね」と母をいたわる言葉でした。自分でもびっくりしました。

このような神様のお働きに気づくと、母を支えたいというほうに、自然と心が動いたんです。こういう体験を重ねていくうちに、母との暮らしを楽しめるようになっていきました。母も、認知症になってからのほうがよく笑うようになり、以前より明るくなるなんて、思いもしなかったことでした。

そして、母が結んでくれたご縁もありました。月に1度、うちの教会にお参りされている洋子さんは、お参りされてもすぐ帰られていたので、

ゆっくり話をしたことがなかったんですけど、母の認知症のことをお聞きになられて、「実は、私も、同居している夫の両親が認知症なんです」と、悩みをお話ししてくださるようになりました。共通の話題をきっかけにいろんな話をするようになり、教会で過ごす時間が長くなってきました。心にたまったものを吐き出してください、お互い励ましあったりして、洋子さんの笑顔が増えていきました。

私もありがたいなあと思うと同時に、実家の母が私にしてくれたことを思い出して、「私も、母に吐き出させてもらって今があるんだから、とことん、洋子さんにも吐き出してもらおう。この、吐き出した先に何かあるはず」と、祈りながら愚痴を聞かせてもらおうようにしました。

そんな日々を過ごす中で、洋子さんのご両親の認知症が進まれましたので、施設を探しておられました。「どうか、良い施設とご縁がありますように」とお願いしておられましたら、ある時、新しい施設の広告が入ってきたので、見学に行かれると、施設のそばに金光教の教会があったんです。洋子さんは、「びつくりしました！神様に守られていると感じました。広告を見つけたことも、オープンしたばかりですんなり入れたことも、神様が準備してくれたタイミングですわね！」と言われたんです。吐き出したあとには、神様のおかげを感じる心や感謝の心が入るスペースができていました。

母が認知症になったら、もれなく付いて来るものは、つらいこと、嫌なことだと思っていた

けど、そんなことばかりじゃなかったんです。私自身が、吐き出すこと、聞いてもらうことの大切さを実感したおかげで、悩みを抱える方への寄り添い方が変わってきました。そして、神様は、日々の暮らしの中に、前になり、後ろになつて働きかけてくださっていること。「神々イミング」に気づけると、心が無理なく動くこと。楽しくなってくることを体験しています。皆さんも、つらいこと、きついこと、あると思います。神様は、絶えず、日々の暮らしの中にお働きくださっています。その「神々イミング」に気づけたら、楽しくなつてきます。気づけるためには、心にたまつたものを吐き出すことが大事なので、吐き出せる場所や、吐き出せる人に出会ってほしいと願っています。私も

安心して吐き出してもらえる場所を作っていく
たいと思います。



《私からのメッセージ》
「私を変えたもの」

大阪府・鳳教会 工藤由岐子

おはようございます。大阪府の金光教 鳳教おおとり会かいの、工藤由岐子ゆきこです。今日は私の、小学生の時の話をしたいと思います。

私は昔、極度の人見知りでした。1人っ子のせいもあってか、集団生活になかなかなじめず、学校が苦手でした。

家の中では、両親と普通に話し、素の自分ですいられました。でも、夜になると、「ああ、明日も学校か」と思ってしまうからか、気分が悪くなるのがよくありました。学校では、口を固く閉じてしまっ、思っていることを言葉

にも顔にも出せませんでした。

新学期になると、担任の先生の家庭訪問がありますが、特に記憶に残っているのは、低学年の時の先生が、母に「しゃべってくれなくて困ってます！ 特別な学校に替わられてはどうか」と言われたことです。先生は、私を心配して言うてくださったんだと思うんですが、当時の私には、「こんな子は受け入れられない」というふうふうに聞こえ、子ども心にも、私は先生に嫌われているんだなと思いました。母も、きつとつらかったと思います。

父と母はそんな私を心配して、「どうか、娘が都合よく学校生活を送り、自分の思っていることを表現できますように」と、毎日神様にお祈りしてくれていました。

そうして月日が経ち、私は5年生になりました。その時の受け持ちの先生が、木村吉男先生きむらよしおという、当時36歳の先生でした。先生は、私が問題のある生徒だというのを聞いておられ、最初から意識して私のことを見てくれていたそうです。そして先生はあることを思いつかれました。それは「先生への手紙」というノートを作り、そこに授業のことでも友達のことでも、何でもいいから自由に書いて、出してくださいというものでした。それを聞いて、私の心が動きました。私は全然おしゃべりができないけれど、書くことならできるかと思いました。最初に何を書いたか覚えていませんが、印象に残っているのは、先生がいつも、私が書いた文章と同じくらいの長さで、丁寧にお返事を下さったこ

とでした。返事の最後に、先生手作りの動物シールが貼ってありました。毎回シールのイラストが変わるので、それを見るのも楽しみでした。先生とのやり取りが続いて、だんだん私の中で変化が起きてきました。感情を全然出せなかった私が、先生への手紙の中では、うれしかったこと悲しかったことを、素直に言えるようになりました。

私の心が開くきっかけとなった「先生への手紙」ですが、さらに私が変わる、もう1つの出来事がありました。それは、6年生の時です。夏休み中に体験したことを作文にするという宿題が出ましたが、私の書いたものが選ばれ、学校を代表して発表することになりました。市内に16校の小学校がありまして、それぞれの代

表者がうちの学校に集まり、順番に発表していくというものでした。

親は驚いて、「これは大変なことになった！この子にはできないから、お断りしないと」と思ったのですが、木村先生にこう言われました。「これは校長先生とも話し合って決めたことです。娘さんにとっても、良い経験になると思いますから」。それを聞いて、両親も応援してくれました。

木村先生は、日曜日なのに学校に出てきてくださり、発表に向けてのお稽古をしてくれました。講堂で名前を呼ばれたら、ステージの横から階段を上がり、定位置に着くと、真つすぐ前を向いて、ひと呼吸置いてから礼をする、という所作を教わりました。

当日は、うちの学校の6年生全員と、市の教育委員会の先生方も来られました。私の両親も来ていました。ドキドキしましたが、無事に発表会を終えることができました。その時の様子を、後日、木村先生が学級通信に載せてくださいました。このような内容です。

「由岐子さんが本校の代表に選ばれたことは、クラスにとっても実に名誉なことで、共に喜び合いたいと思います。14番目に発表した由岐子さんは、落ち着いた、はつきりとした口調で、自分の体験をみんなに話しかけるように発表しました。終始堂々とした態度で、その内容、音量等、とにかく立派でした。講評してくださいました教育委員会の先生も、特に由岐子さんの名前を上げ、褒めておられました。最高の出来栄え

でした」。そんなふうに書かれていました。

先生は私のことだけじゃなく、何かで頑張った生徒がいたら、学級通信に名前を載せて褒めてくれる人でした。私は、自分がやったというより、何かの力に突き動かされたような感じでした。それが神様だったのだと思います。

後から先生に聞いたのですが、発表が終わって、先生が私の両親の所にいくと、2人とも、「先生ありがとうございます」と言った後は何も言えず、泣いていたそうです。

かつて、「しゃべってくれなくて困ってます」と言われた私が、体験発表をさせていただけるまでになりました。これは神様が木村先生との出会いを用意してくださって、私を育ててくださったからだと、今ではそう思います。娘の

私を心配し、祈り続けてくれていた両親にも、とても感謝しています。

私はその日以来、カチカチだった固い殻が破れました。笑うことも増えました。

そして歳月が流れ、私は23歳で金光教の教師になり、結婚もし、2人の子どもを授かりました。その子たちも、もう社会人です。

小学生の時の私のように、感情が出せない、話せないという方もいらっしゃると思います。が、「どうか、良い出会いがありますように。また、1歩踏み出す勇氣を持てますように。その少しの勇氣に、あなたの運命が変わりますように」と祈っております。

《先生のおはなし》

「仕事」

滋賀県・湖北教会 井上宗一

(ナレーション)

おはようございます。案内役の岩崎弥生いわさきやよいです。今朝は、滋賀県湖北こほく教会・井上宗一いのうえむねかずさんのお話をお聞きいただきます。タイトルは「仕事」。

私は金光教の教師になり30数年が過ぎ、現在58才。そんな私の15年前の出来事から聞いてください。

その頃、私の娘は中学2年生でした。その娘から厳しい一言を浴びせられました。

「お父ちゃんがちゃんと働けばいい」

仕事をしているつもりの方は、「この子は、自分が言った事が分かっているのか？」と、娘の一言に、一瞬、戸惑いました。

その時の娘は、周囲の変化に戸惑っていました。当時はまだスマホはありませんでしたが、中学生も携帯電話を持つ子が次々と増えていました。夏休みが終わり学校へ行くと、携帯電話を持つ同級生が増えていて、友達同士がメールのやりとりをする特別な輪が広がっていたのです。娘は、その見えない輪の中に加われませんでした。

前から、欲しい欲しいと言ってきましたが、状況が一変し、みんな持つてると言い出しました。「AちゃんもBちゃんも、みんな持つている。持つていないのは私だけ。なんであかんの？」

私は「テレビゲームを買うのと携帯電話を買うのとは、訳が違う。携帯電話を買えば、毎月支払わなければならないお金が必要なんだよ。あなたの携帯電話に毎月お金を支払う余裕は、この家にはない。だから買わないものは買わない」と、説得をする私に向かって言った娘の一言が、「それならお父ちゃんがちゃんと働けばいい」だったのです。

夕食後のリビング。時が一瞬止まったように静まり返りました。娘も「しまった」と思ったかもしれせん。

私は口を開きました。

「あなたの言う働くってどういうこと？」と言うと娘は、「ネクタイをして仕事場に行くこと」と言います。

「金光教の教会であれこれしているのは働いていないのか？」と私が言うと、「おじいちゃんには頑張ってるけど、お父さんは違う」と娘は言うのでした。

教会長であるおじいちゃんの仕事をサポートするのが、私の仕事でした。おじいちゃんの仕事があったただうまく行くために、毎日働いていました。掃除はもちろん、庭の手入れ、家やモノの修繕を始め、支払いが終わった大量の領収書の整理など、おじいちゃんの苦手なややこしい業務などなど。

娘の友だちからは、父親ではなく雇われた使用人だと思われていたほどです。作業服で働くことがほぼ日課でしたが、娘にすればそれは「仕事」ではなかったようです。

私は娘とのやりとりにショックを受けながらも、ずっとそのことが心の隅に残っていました。

その後、ある機会に、私のこの体験を金光教の先生方に聞いていただきました。

先生の1人は、「金光教の教会の教会長を支える役割は、教会にとって大切な仕事であり、さらに教会をきれいに保つことは、神様のお働きをサポートすることにつながると思われる、必要な仕事である」と言ってくださり、ただただ雑用に追われる日々を送るような私の姿も、金光教の教会にとって大事な仕事なんだ、と話してくださいました。

またある方は、「金銭を伴う就労のみが仕事ではないのではないかと、別の視点を与えてくださいました。

思うに、家事や子育ては、仕事というのも弊があるのかもしれませんが、命を支え育む尊いお仕事と思わずにはおれません。夫婦共働きが当たり前の時代に、いわゆる家事や育児を専業とする働きは、仕事をしていないように受け取られがちなところがありますが、お給料こそ受け取らないものの、夫婦でそれぞれの働きを支え合う必要な就労のカたちであり、まさにプライズレス。とりわけ子育ては未来を託す尊い仕事と感じられます。

このように先生方のありがたいお言葉を頂き、私も自分のこれまでの仕事に対する誇りを、改めて持つことができました。

あれから15年。

娘は2人の子を産むという大仕事を果たし、

その子たちは「ジイジ」と言っで私と遊んでく
れます。娘は現在、専業主婦。幼い2児の母と
して、そして妻として、自分の務めに日々格闘
し、奮闘し、その尊い仕事に喜びを感じていま
す。

(ナレーション)

いかがでしたか。今日のお話で、「仕事」と
いう意味を、私も改めて考えさせられました。

ある哲学者は、山村では「仕事」とは、村を守
るために自然と関わって、山林や田んぼの手入
れ、山道や水路の整備をすること。「稼ぎ」と
は、「出稼ぎ」と言いますが、現金収入を得る
こと。そんなふうに使分けしていると聞きまし
た。

稼ぐことも生きていく上で大切なことだ
が、天地のお恵み、神様の御働きごんがしに感謝し、天
地の道理に沿った生き方を教え導いていく教会
を守っていく営みは、まさに山村で言われてい
る「仕事」になるわけです。いのちをつないで
いく子育てもそうでしょうし、家庭の営みを続
けていく家事も大切な「仕事」となるわけです。
15年の時を経て「仕事」に向き合う親子の姿
が、語られていました。

《信心ライブ》

「神さん助けて下さい」

(ナレーション)

おはようございます。今日は兵庫県布引教会

・矢野正やのただすさんのお話を聞いていただきます。

ある日、布引教会に70代の女性がお参りになり、「知り合いが亡くなってお葬式に行けなかったので、お墓参りに行ってきます」、こう言っ
て出て行かれたそうです。ところが、この女性、墓地の場所は知っていても、その中のどこにお墓があるのかわからなかったそうです。矢野さんは心配しながら無事を願って待っていました。しばらくして、その方が帰って来られました。

「お墓の場所分かったんですか?」って聞くと、「いや、分かりませんでした」って言われますね。「墓園事務所にでも行ったんですか?」って聞くと、「いいえ」って言われますね。「どうされたんですか?」って尋ねたらね、入り口に立って、「金光様、誰それさん誰それさんっていうのは亡くなられた方の名前ね。「金光様金光様、誰それさん、どこですか?」と言うて祈ったって言いますね。そうすると、「こっちこっち、っていう声でした」って言いますね。誰もいませんよ。「こっちこっちっていう声でしたから、そちらのほうへ行きました」と言われる。行って、キョロキョロと見て、何もありませんから、もう一度お祈りしましたら、また、「こっちこっち」って

う声でしたって言うんです。3度ほどそういうふうになさって、それからキョロキョロって見たら、お墓があったんやね。それで、拜んで帰ってきましたっていうことをおっしゃいました。

そんなことがあるのかなと思いました。

(ナレーション)

それからしばらくたって、矢野さんは、ある研修会の下見に、40分バスに乗って、山に登りました。下見がすみ、帰ろうとバスの時刻表を見ると、なんと3時間待ち。そこで3時間待ちか、歩いて下りようか迷いましたが、3時間かけても、歩いて下りることに決めました。

でも、来た道を下りようか。それとも、向こうの道に行こうか。どうしようかと思った時に、「こっちこっち」って言うたおばあさんのことを思い出しまして。だから私もそこで「どちらに参りましょうか」と祈りました。風で木々がさやさや揺れる音やら、鳥の鳴き声が聞こえますけどもね。「こっちこっち」なんか言うてくれへん。何にも聞こえへんがな。「生神金光大神様、天地金乃神様、どちらへ参りましょうか」と、こう祈っておりましたら、来た道と反対側からね、ランニングをされるおじさんが走ってこられました。「こんな所にランニングしてる人おるんやな」と思って。あっ、この方に聞こうと思ってね。「すみません。駅に行きたいんですけど」。そしたら、来たほうと反対側を指

して、「こっちに行きなさい」って言われるんです。「あつ、そうですか」「こっちにずっと歩いて行ったら墓園があるから。その墓園に入りなさい。墓園の中に入ったらね。下へ下りていく道がありますから。そこを下りて行きなさい」って言われるんですね。「下りて行ったらね、あーなってこーなって」って言いはるんやけど、全部覚えられませんでしょ？ まあ、まっすぐ行って墓地があつて、真ん中の道を下りていいたら下に下りれるんやな、と思つて、「ありがとうございました」って言ったら、そのおじさんは走って行かれました。僕はその方に言われたとおりに、ずーっと道を歩いて行って、そしたら、墓園が本当にありますね。じゃあ、ここ下りて行ったらいいんかなと思つて、そこ

またずっと下りて行きました。ずっと下りて行きましたらね、分かれ道に出ました。えつ、と思いましたが。真ん中の道と右の道と左の道とが出てきましたんやな。それで、困りました。困つて、どうしようか。祈りますわね。「神様、どちらに参りましょうか」って祈りました。そしたらふつと「左」って思つたんですね。あつ、左つて思つたな。そしたら左に行こうかと思つたんですけど、いや、念のために、もう1回ちゃんと祈ろうと思つて、また一生懸命祈ったらね、今度は「右」って思つたんやな。最初は左つて思つたんです。次も左つて思つたら、左に行つとったんですけどね。次は右つて思つてしまったから、困つたね、本当に困りました。どうしようと思つて。「僕はどうしましょう」と

思って、「助けてください」って言うて祈って
ましたんや。祈ってましたら、道の端のところ
におうちがあつてね、人が出てきますねん。ご
婦人が。「あつ、人が出てきたな」思つて。
ああ、この方に聞こうと思つて。「すいません。
駅に行きたいんですけど」「あつ、駅ですか？
真ん中の道」って言われまして。「えつ、真ん
中ですか？ この細い道を行いますのん？」「そ
う真ん中ですよ」。危ないところですよ。「あ
あ、そうですか。下りて行ったら、駅に着くん
ですか？」「いや、そういうわけにいけへんの
やけどな。坂をずっと下りて行くでしょ。平た
んになってきますから、平たんになってきたら
またちょっと左に行かないといけませんねん。
まあ下りて行ったら分かりますわ」と言われて。

「ありがとうございました」と言つて下りて行
きました。

平たんになってきたら、左に行く道があるん
ですけど。何本か道があるからね。どの道かし
らん、と思つて歩いておりましたら、前からほ
つと人が出てきたんです。聞いとこうかと思つ
て。「あの、駅に行きたいんですけど」って言
ったら、「あんたこっち行ったらあかんよ。あ
そこの道を下りなさい」って、もう通り過ぎて
た道を言われてね。その通りにして、駅に出ま
した。

お墓に行かれた女性はね、祈ったら「こっち
こっち」っていう声が聞こえたんやな。僕の場合
合はそういう声が聞こえせんねん。聞こえま
せんねんけど、「人」を差し向けてくださつた

んやね、僕の場合は。人によって違うということ
とですわな。「こつちこつち」って聞こえんか
らあかんということでもないんやな。真剣に本
気で祈ったら、何とかして教えてやろうとい
うようなことになるんですわな。

(ナレーション)

いかがでしたか？

金光教の教祖の教えに「神へは何でも願え。

神は頼まれるのが役である」とあります。私は
このお話を聞いて、どんなささいな事でもお願
いして良いんだ。そして、お願いすると、神様
があの手この手を使って、その人に合ったよう
に道を付けてくれるんだと、神様を身近に感じ、
心強く思いました。



《ピックアップ》テーマ：介護

「神かみこころ心目覚めて」

愛媛県・伊予吉田教会 尾崎順子おざきじゆんこ

(平成15年2月12日放送)

私の父は、まもなく85歳になりますが、パーキンソンの持病があるところに、昨年、ヘルペスを患ったことで、その後体調がずっと悪化しなくなり、体の自由が効かなくなってきました。歩行が困難となり、家の中はなんとか自分で動けますが、服を着替えることなど、生活の全般に何らかの手助けを必要とする状態となりました。また、ずっとヘルペスの後遺症があり、神経痛で難儀をしています。

発症前はちょっと短気な面はあるものの、持

病を抱えつつ、それなりのユーモアセンスもあり、穏やかな年寄りという感じでした。それが痛みを伴うこの病気になってからというもの、薬の副作用もあつてか、思うようにならないと腹を立て、とにかくわがままになり、「どうしてこんなつらい病気になったものか」と愚痴を言い、まるで性格が変わったかのようになってしまうのです。

最初は、症状の重さもあり、「かわいそうに」という思いで世話を焼きながら、そのうちには良くなるだろうと思っていました。しかし、皮膚表面の症状が癒えても、なかなか痛みが取れなくて絶えず怒りっぽくなっている父と接することが長引くにつれ、私自身、精神的に疲れを感じるようになっていました。

そんなある日、いつものように父の付き添いで病院へ行った時のこと、近所に住む奥さんが義理のお父さんの車いすを押している姿を目にしました。彼女とは、去年、私が町内の世話役を引き受けたことからあいさつを交わすようになりました。とても感じのいい奥さんだなあと思っていました。詳しい家庭の事情までは知りませんでした。

待合室から診察室へ、そして途中でのトイレ、会計での支払い、駐車場から玄関まで車を移動させることなど、ちょうど同じ時間帯だったもので、私も同じような流れで父の車いすを押しておりました。「お大事に」と、お互いに言い合って別れたのですが、赤ちゃんを背負い、傍らに幼児を連れ、そしてお義父さんの車いすを

押している彼女の姿が、私にはとても神々しいものに思えたのです。というのも、そこには負いや悲壮感といったものが感じられず、実にさりげなく優しくお世話されている様子に真心が感じられ、こちらまでも爽やかな気持ちになれたからです。と同時に、自分は一体どんなふうに父に接しているかを改めて考え直させられたのでした。

例えば、「背中をさすってくれ」「湿布を張ってくれ」など、用事を頼まれるたびに口には出さないものの「またか」とか、「1度に言つてよね」という思いが沸々湧いてきては、言葉の1つも掛けずに、ついとげとげしく接してしまうのです。「確かにつらいだろうけれど、あそこまで横暴な言い方はしなくてもいいのに」

「もう少し、世話になってありがとうという感謝の言葉の1つもあってもいいじゃないの」といった具合に、心の中では病人を責めてばかりの日々でした。

家の中の態度は、きつと病院でもそのまま出ていたことでしょう。もしかしたら、「私は父の世話で大変なんですよ」と顔に書いているような状態で悲壯感を漂わせ、機械的に冷たく車いすを押していたかもしれません。突き詰めていくと、これだけしてあげているという自分の思いばかりが強くて、相手に対して、「つらいだろうに、少しでも痛みが和らぎますように」という祈りの心は消えていたのです。そして、父がこの年齢まで、無事に過ごさせていたのだことの方が、なんとありがたいことであっ

たかを痛感したのでした。

どちらがつかいかということで比較すれば、はるかに父のほうがつかいわけで、よく「代われるものなら代わってやりたい」と言います。しかし、代われない以上、こちらは相手の助けを願いながら、私の役目を果たせる限り、お世話をさせていただけこうと、思いを変えることにしたのです。

まず、言葉遣いを少し優しく丁寧に言うように心掛けました。父から呼ばれるたびに「ななに？」と返事をしていたのを、「はい」と答えるようにしただけで、いら立ちや腹立たしさが少しずつ緩和されるような感じになってきました。こちらの態度が少しずつ変わることによって父の言葉も変わってきました。例えば、体を

さすっっている時にも、「すまない」とか、「もういいよ」という言葉が聞かれるようになりました。私のほうも惰性でさすっっていたところを心の中でわびたり、今までとは違うその場の空気の和らぎを感じたりして、お互いの助かる方向が見え始めたように思います。

金光教では「かわいそうと思う心が神心である」と言われており、そう思う心は、誰もが持ち合わせています。相手を思いやる心で人の助かりを神様に祈っていくことが、共に助かることになってくるのだと思います。生活の場では、何をするにも真心を込めて行い、人に対しては、優しく親切を尽くすことが大切だと思います。

病院にはいろいろと大変な状況の患者さんや家族の方がおられますが、そういう中で彼女の

ように温かな態度の人がいると、周りの人々の心が自然と和むことになるのでしよう。彼女の心にある神心が、人々の心に響き合うという感じでしょうか。事実、私自身、しんどい状況にどっぷりつかっているうちに、凍らせてしまった神心を、目覚めさせられた気持ちがあったのです。

父は完治と言うには時間が掛かるかも知れませんが、せつかく目覚めた私の神心を眠らせることなく、父を含め、病氣の人たちのことを思いやり、回復を祈りつつ、引き続き努めて優しく接していきたいものだと思います。

《ピックアップ》テーマ：介護

「母の笑顔」

大阪府・天満教会 てんま 森田貴子 もりた たかこ

（平成18年12月27日放送）

今年88歳になる私の母は、現在、週2回、介護施設のデイサービスのお世話になってます。家に帰って来た母に、「お母さん、お帰りなさい」と玄関で迎えますと、ニコツと笑顔で「はい、お帰り、ご苦労さんです」と答えます。母は、いつもとんちんかんな会話で、家族を笑わせてくれています。

私の家は金光教の教会で、父は3代目になります。実の娘の私と縁あって夫は教会を後継してくれました。子どもたちも4人授かり、幸せ

な家庭を築かせていただいています。

母は、若い頃から、よく働くしつかり者で、特に、戦争の後遺症で耳が不自由な父のために、いつもメモを取り、人との会話の仲立ちをする献身的な人でしたが、8年ほど前から、徐々に認知症の症状が始めました。

ある日の午前中のこと、私はお風呂場や洗面所の掃除をしていますと、何やら、焦げたような臭いと共に黒い煙が漂ってくるのです。もしやと思い、台所に飛んでいきますと、真っ黒な煙がもうもうと立ちこめ、ガスコンロから大きな火の手が天井まで上がっていました。私はその瞬間、「神様助けてください」と近くにあったバスタオルを水で濡らし覆いかぶせ、小さな消火器で、幸いにも消火することができました。

夫と父が驚いて駆けつけてくれましたが、部屋の中は黒い煙が充満し、窓から吹き出ていました。天井は幸いにも新建材のおかげで表面が焼け焦げただけで済みました。小火^{ほや}で済んで良かったとホッとした途端、ヘナヘナつと座り込んでしまいました。気を取り直して、火元をよく

見ると、コンロには天ぷら油の入った鍋が置いてあり、どうも、母が火を付けたままゴミを外に出しに行き、そのまま忘れてしまったことが原因のようでした。

しばらくして、何も知らない母が外から帰ってきてみると、事の重大さにあぜんとしていましたが、わびる様子もなく、「まあ大変なことやったね」とまるで他人事のように言うのです。私は、その時、母を責めようとしたが、夫が

傍らで、「お母さんは、ひよつとして認知症が始まったんと違うか？」と言った言葉に、「まさか！」と信じられませんでした。この出来事から、次第に認知症が進行するようになりました。

ある時、母の枕元にあつた時計が見当たらないので、尋ねると「私は知らんよ。誰かが持っていたんと違う？」ととぼけるのです。結局、時計はタンスの中から見つかりました。「お母さん、ここにあるやんか」と言うと、「誰かが隠したんや」と言い張るのです。そんな出来事が次から次と起こってきました。すぐに物事を忘れてしまう母に、何度も同じ説明をしなければならぬことが煩わしくて、つい、その態度に腹が立ち、情けない思いでいっぱいになりま

した。

次第に母を責めてばかりいるようになり、「なんでこんな事が分からの」と言葉遣いも荒くなります。母もいよいよ険しい顔で反抗的な態度になります。すると、娘や息子までが、「おばあちゃんはしようがないなあ、ええかげんにしいや」と責め立てます。

そんなある時、夫が、「こんな時こそお母さんに優しくしいや。お母さんは昔、赤ちゃんのお前を、愛情を込めて育ててくれたんやろ。お母さんは今、反対に赤ちゃんになったんやから、今度はお前がお母さんになって、どんなことでも優しく受け入れて、抱きしめてあげや」とい

さめてくれました。更に、「どんな時でも、笑いのある家、優しくて思いやりのある家にしよ

うや」と励ましてくれました。

なかなか難しいことでしたが、できる限り、たしなめることをやめ、笑顔で母のありのままの姿を受け入れるように努めました。すると不思議なことに、徐々に母は、笑顔を取り戻し、何かをしてあげると、「ありがとう。お世話になります」とお礼の言葉を言うようになったのです。母の笑顔に笑顔で応える。それだけで母は幸せいっぱい顔になります。私を慈しんで育ててくれた母に、今、せめてもの恩返しが出てくることに、何かありがたい気持ちでいっぱいになるのです。

金光教の教祖様は「かわいそうに、何とかしてあげたいと思う心がそのまま神の心である」と論しておられます。私が神様の心のように母

を慈しめば慈しむほど、母もまた神様の心のよ
うに穏やかにされる。その姿を神様が1番喜ば
れ、幸せが生まれる元になるような気がしてな
りません。

母は、今年になつて風邪をこじらせ、入院し
たことが元で、とうとう車椅子の生活になつて
しまいました。幸い、老人介護の認定を受け、
デイサービスのお世話になることができまし
た。また、家では子どもたちが、「おばあちゃ
んは笑顔が1番やなあ」と気持ちよく手伝つて
くれ、何とか日常生活をこなすことができてお
ります。家族をはじめ、いろんな方のお世話に
なることがどんなにありがたいことか、感謝の
心でいっぱいです。先日、施設の方が、「お母
さんはいつも笑顔で『お世話になります』と感

謝してくださるので、施設で1番の人気者なん
ですよ」と語ってくれました。今日も母の笑顔
に、私も負けずに笑顔で頑張っていきたいと思
います。



《先生のおはなし》

「一生涯ない親に巡り合う」

兵庫県・香櫨園教会 武部和加子

(ナレーション)

おはようございます。案内役の大林誠おおばやし まことです。

今日は、児童相談所から委託された子どもの養育に取り組んでいる、兵庫県西宮市、金光教香櫨園こうろえん教会の武部和加子たけべ かのこさんによるお話です。題して、「一生涯ない親に巡り合う」。

わが家は里親家庭として、親と暮らせない子どもたちを家庭に迎え入れ、養育しています。私は過去に、何件か重い悩みを抱えた方の話を電話で聞かせてもらっていました。苦しむ方の

多くは、幼少期から親子関係に問題があり、できることなら小さい頃になんとかできたら、という思いが根底にありました。その思いから、親と暮らせない子どもと、小さい頃から関われる里親になろうと思いました。

初めてわが家に委託されたのは、実親から虐待を受け、人生のほとんどを施設で過ごした4歳の男の子でした。

彼との生活で、人が幸せに生きるために必要なものは何かという事を学びました。それは、「命を丸ごと受け入れ、大切にしてくれる存在」です。

彼には、つらい生い立ちや過酷な環境による愛着障害の症状がみられました。愛着障害とは、親との絆が持てなかった、または不安定な絆で

あつた場合に起きる生きづらさです。

誰とも絆を持ったことがない彼との生活は、過酷なものでした。

私たちとも絆がないので、こちらの言うことは一切聞きません。叫びたければ何度注意されても叫び続け、危ないことも、人に迷惑になる事も、どれだけ約束しても繰り返しました。思い通りにならないと癩癩かんしゃくを起こし、手が付けられないので放っておくと、放っておかれることに寂しさを覚え、また癩癩かんしゃくを起こしました。絆がないので、平気で嘘もつきました。

心が通い合わない日々が続く中でも、「彼に罪はない。許さないと。受け入れないと」と、必死に頑張りましたが、いくら頑張っても思つた結果が出ないどころか、裏切られる事も起き

ました。そして半年が過ぎた頃、私の心と体は動かなくなりました。「お母さん」と呼ばれるだけで、体が拒否反応を示すようになりました。関わる事が苦しくて、少し距離を置くと、余計に放っておけないようなことをしてきます。彼は彼で自分を見てもらおうと必死。裏腹に、私の心はどんどん離れていきました。

不遇な子どもを助けたい一心で里親になりましたが、「目の前にいるこの子を助けたい」という気持ちはもろくも崩れ、理想とされる対応ができず、「私は里親なんかできる器じゃなかったんだ」と、とても苦しみました。実子の育てで経験しなかった事ばかり起き、夫婦でその日あつた彼の問題行動を報告し、なぜそんな事をしてしまうのか、その行動の根底にある原

因を探り、明日はどう関わり、対応するのがよいのか、毎日毎日、何時間も話し合いました。

苦しい時は教会に参拝し、先生に悩みを聞いていただき、神前に身を置くだけで、心が落ち着きました。参拝すると、神様が守ってくださると思え、安心ができました。そうやって神様におすがりし、安心と心強さを頂くと、いっばいいっばいになった心に余裕が生まれました。夫婦一丸となり、全身全霊で彼と向き合い、3年経った今、少しずつですが、私たちとの絆ができ、委託当初にあった問題行動は無くなりました。

例えば、学校で先生に叱られたことも、嘘をつかずに話せるようになりました。以前なら自己防衛のために嘘をついたり、ごまかしたり、

逃げようとしていましたが、最近では「ごめんなさい」と謝って、いけないと思うことをきちんと報告ができるようになりました。間違ったことをしても、殴られない、嫌われない。叱られても守ってもらっているという絆と安心感が少しはできてきたのかなと思います。

金光教の御教みかみえに「神は人間の親である。信心する者は、一生死なない親に巡り会い、おかげを受けていくのである」というものがあります。

たった1つ、親との絆が無いことで、生きづらさを抱えることになります。彼には私たち里親がおりますが、実親との絆が持てず、生きづらさを抱える方に、教会の門をたたいてほしいと思っています。そして、教会の先生を通して、

いつでもあなたの命を丸ごと受け入れ、愛して
くださる神様に会ってください。孤独や生き
づらさを抱える方が、どうぞ安心して生きてい
けますように。

(ナレーション)

いかがでしたか。子どもが育っていく上に、
また、大人が健やかに生きていく上にも、自分
は愛されているという実感がいかに大切かを教
えられるお話でした。

里子を育てることに挫折しそうになった時、
武部さんを救ったものは何だったのか。それは、
一緒に悩んでくれる夫がいてくれたこと。また
親のように親身に話を聞いてくださる教会の先
生がおられたこと。さらに人間を無条件に受け

止め、わが子として限りない愛情を注いでくだ
さる神様の存在だったんですね。こうして、二
重にも、三重にも愛に守られていることを感じ
ながら、武部さんは再び元気を取り戻してい
れました。

絆に救われたのは、里親である武部さんご自
身だったんですね。

《先生のおはなし》

「いのちの羽ばたき」

兵庫県・西宮教会 西村明正

(ナレーション)

おはようございます。案内役の岩崎弥生いわさきやよいです。

皆さん、最近、空を見上げていますか？ 「今

日の天気」もスマホで確認し、空を見上げることが少なくなっている気がします。今日のお話は、大空を飛ぶ鳥を見てのお話です。

兵庫県金光教 西宮教会にしのみや・西村明正にしむらあきまささんのお

話で、「いのちの羽ばたき」です。

動物たちの生きる姿に、強く心を動かされる

時があります。

例えば、ある夏の日のことです。私が訪れた

動物園の野外ステージでは、鳥のパフォーマン
スショーが始まるうとしていました。タカやワ
シヤハヤブサが大空を駆け巡り、観客席のすぐ
目の前を飛び抜ける、動物園の目玉アトラクシ
ョンです。

ショーの舞台は、小振りのサッカー場のよう
な芝生の広場。ぐるりと取り囲む観客席は、夏
休みを楽しむ大勢の人で溢れ返っています。私
たち一行も何とか空席を見つけて、陣取ること
ができました。

「それでは、ショーのスタートです！」

勢いよく声が響き渡り、続いて小さくホイッ
スルが鳴らされました。一瞬の間を置いて、会
場の入り口に並んだ木立をすり抜けるようにし

て、大きなタカが滑らかに飛び出してきます。

芝生のはるか向こうに立つ飼育員目がけて、翼をいっぱい広げ、真っ直ぐに飛ばたいいきます。飼育員の腕に見事に着地を決めると、今度はこちらに向かつて飛び上がりました。タカが舞うたびに、その雄大な姿に客席からは思わず声が漏れます。

タカに続いてワシ、ハヤブサ、フクロウ、そして最後はインコの群れが、そうやって大空を翔けていきました。

昨日まで続いた雨が嘘みたいで、真つ青な空がどこまでも広がっています。照りつける太陽が、青空を行く鳥たちの姿を鮮やかに際立たせていました。その姿があまりにも美しく、輝かしくて、私は涙が溢れて止まらなくなつて

しまいました。

鳥たちが堂々と胸を張つて、大きく翼を広げ、前だけを見据えて、澄み切つた青空を真っ直ぐ飛んでいくように、そんなふうに私も生きていきたいらしいのに……。そう思つたのです。

私たちは、気がつけばこの世界に生まれ落ちていて、何が何だかよくわからないまま、まるで背中を押されるようにして、待たなしで人生が進んでいきます。

楽しいことばかりではありません。つらいこと、悲しいこともたくさん起こってきます。仕事で惨めな思いをしたり、出口の見えない人間関係に苦しんだり、病気の不安に苛まれたり。「どうして私はこうなんだろう」と嘆いてみても、持つて生まれた自分の性分が変わるわけ

もないし、置かれた境遇を誰かと取り替えるわけにもいきません。

そうやって、簡単には折り合いのつかない毎日、それでも何とか折り合いをつけて生きている。それが私たち人間の、一面の姿なのではないでしょうか。

それでも私には、そのシヨーを見た時、美しく飛ぶ鳥たちの姿が、私たち人間に重なって見えたのです。シヨーの鳥たちも、私たち人間も、いや、あらゆる生命せいめいが、限定された条件の中を生きています。こうあるしかないそれぞれの中のいのちを、懸命に、果敢に飛び続けている。すべての生命が、与えられた状況や限界の中にあるながら、なおも真つすぐに前を見据えながら、ひたむきにいのちを燃やして生きている。

その姿は、たとえ地面を這はいずり回っているように見えたとしても、大空を羽ばたく鳥のように美しく、気高く、尊いはずだと思ったのです。

私は鳥の飛ぶ姿に、人間が生きる本当の姿、いのちの姿を見たのかもしれない。その時、私はすべてのいのちに割れんばかりの拍手を送りたい気持ちに駆られました。

今日も世界中で、それぞれのいのちが、それぞれに与えられた舞台に向かって羽ばたいていきます。その全てのいのちの羽ばたきを、見守る誰かがいてほしいと願います。いや、どこまでも続くこの大空が、足元に広がるこの大地が、見守らずにはおかないはずだと、私は強く思うのです。

(ナレーション)

いかがでしたか。

よそ見せずに、一生懸命生きている生き物に出会すと、そのけなげな姿に感動し、応援したくなるような気持ちになることがあります。西村さんは、雨上がりの真つ青な空に飛ぶ鳥の姿が輝いて見えました。その姿に人間を重ね合わせ、誰もが皆、どのような人生であっても懸命に大きく翼を広げ、前を向いて飛ぼうとしているという感動が湧き起こってきたようでした。そして、そこに人間が生きる本当の姿、いのちの姿を見、拍手を送りたくなっただけです。けなげに生きている私たち人間も神様が同じように、温かい眼差しで包んでくださっているのではないのでしょうか。

私も今日は、空を見上げてみようと思います。
何かを感じられるかもしれません。



《先生のおはなし》

「お祖母ちゃんのソファ」

愛知県・牧野教会 服部貴子

(ナレーション)

おはようございます。案内役の大林おおばやし誠まことです。以前、ある心配事があって、教会の先生にお話しした時、「それは、心の無駄遣いだ。心配しても仕方がないことは、神様にお願ねがいして、お任せしておきなさい」と言われたことがあります。無駄遣いはお金や物のことだけではないんですね。今日は私にそんなことを思い出させてくれたお話です。

名古屋市、金光教まきみの牧野教会の服部はつとり貴子たかこさんで、「お祖母おばあちゃんちゃんのソファ」。

家族で話をしていた時のことです。妹が、「私が初めて『神様ってすごい!』と思ったのは、あの時だな」と話し出しました。

それは、亡き祖母が健在で、私たち姉妹がまだ20代の頃のことでした。ある日、近所の家具店から電話がかかってきました。「ご注文の家具の件で…」と言われますが、父も母も心当たりがありません。驚いていると、祖母がソファを注文していたことが分かりました。

80歳を越えた祖母は、早くに夫を亡くし、長年、一家の大黒柱として頑張ってきました。そのため、家のことは、祖母が決めるのが習慣になっています。今回は、居間のソファを思い切って買い替えようと、家具店のチラシを見て注文したようです。

ところが、チラシをよく見ると、サイズやデザインがどうも部屋に合わないように感じます。祖母にそのことを伝えてみましたが、商品を入っている祖母は、「そんなことはないはず」と言って、聞き入れてくれません。

家族が代わる代わる話してみますが、納得するどころか、逆に機嫌を損ねてしまい、ついには「絶対に買う」と言い出してしまいました。元々頑固なところがあり、こうなってしまうと手がつけられません。

そんな様子に父と母は、もうおばあちゃんのおうようにさせてあげようということになったのですが、最後まで納得できなかったのが妹でした。妹は当時まだ学生で、実家を離れた私とは違い、家で長い時間を過ごします。毎日使う

居間で、気に入らないソファを我慢しながら何年も過ごすことを思うと、どうしても嫌だったのでしょうか。私に「もう1回、おばあちゃんを説得してみて」と頼んできました。けれども、私も祖母の気持ちを変えることはできませんでした。

がっかりしている妹に、「これだけ言っても駄目なら仕方ないよ。私はもう、神様にお任せすることにしました。あんたも説得じゃなく、一緒に神様にお願いしよう」と声をかけました。

私の家では、曾祖父の代から金光教の信心をしています。小さい時から、心配事やお願い事を神様にお祈りしてきました。

部屋に合わないソファを毎日我慢しながら使うことになると思うと暗い気持ちになります

が、ソファを買いたいという祖母の気持ちの底には、家族や親類、知人が集まる場所を大切にしたいという思いがあります。祖母の気持ちを傷つけずに、購入を断念させられないかと家族が手を尽くしてみました。が、万策尽きてしまい、せめて神様に、「家族皆が納得する結果になりますように。どうか、この先も家族が笑顔で過ごせますように」と、祈る気持ちになったのでした。

すると当日、思わぬことが起こりました。前もって家具店にも確認していたはずなのに、購入したソファが大きすぎてどうしても部屋の中に入らないのです。これにはお店の方もお手上げで、結局、持ち帰ってもらうことになりました。

お店に申し訳ないので、何か同じ位の値段の物を買うことにしました。すると、母が以前から買い替えたいと思っていた来客用の椅子が見つかって、それを購入することになりました。そして、これまで使っていた来客用の椅子を古いソファの代わりに居間に置いてみると、ぴったりにいい感じに収まったのです。この様子を見て、祖母も心から納得してソファを買うのを諦めてくれたのでした。

この時の出来事が、妹の心に強く印象づけられたようです。妹は、「初めは、『神様にお願いをしたって、どうなるというの?』と思っていたのに、神様にお願したら、誰も思いつかなかった形で解決した。おばあちゃんも傷つかず、お店の人も困らせないで、皆が喜ぶ結果になっ

た。あの時は本当に、『神様ってすごいな〜!』
と思ったよ」と語ったのです。

私は忘れかけていた出来事だったのですが、
妹のその感動に心打たれて、当時のことを思い
出しました。

「皆が集まる居間だから」と家族のことを考
えてくれた祖母の気持ちや、そんな祖母の思い
を大事にしようとした両親の気持ちを、神様が
全部受け止めて、1番良い解決方法に導いてく
れたあの出来事。それが今、妹の心にとどまっ
ていたことを知り、私は温かい気持ちでいつぱ
いになりました。

(ナレーション)

いかがでしたか。どこの家庭でも起こってき

そうなもめ事ですが、みんながお年寄りの気持
ちを大事にしようとしているところがいいです
ね。

そして、どうにもならないと思った時、無駄
に慌てたり騒いだりせず、自分の思い込みをい
ったん放して、神様に引き受けていただくこと
ができる。これが信心する人の強みなんでしょ
うね。そこから、みんながニコニコできるよう
な結果が生まれてくる。

どこにでもありそうに見えて、やっぱりこれ
は、家庭の中に信心が生きていればこそその風景
だなあと、そんなふうに感じました。

《もう一度聞きたいあの話》

「来年の夏には」

福岡県・行橋教会 井出美知雄

(平成17年12月21日放送)

「さあ、おばあちゃん。教会に着いたわよ」。
香織さんは、ひざを痛めているおばあさんを車に乗せて、出勤途中に金光教の教会まで連れてきました。「ありがとう」と、おばあさんはともうれしそうです。

香織さんは、20歳過ぎの娘さんです。おばあさんとお父さんと3人暮らしです。おばあさんは、「こんなに優しい孫に育ってくれまして」と目を細めます。

香織さんは、生まれつき体が弱く、生後6カ

月にして、大学附属病院に長期間入院するような状態でした。それに、母親がいらないだけに、お父さんも愛情を一心に注ぎますし、おばあさんもこまごまと身の回りの面倒を見てきました。

おばあさんは、ふびんが募ってなりません。「この子が、何とか無事に育つことができようように」と、日頃から参拝している教会を訪ねては、神様に祈る日々を送っていました。教会の先生は、その都度、一緒に祈りながら、「香織ちゃんは、あなた方家族に授けられた大切な子どもですから、神様の見守りを頂きながら、大事に育てて、先々を楽しみにしましょう」と励ますのでした。

彼女は、気管支の働きも不調で、のどの下を

切開して穴を開け、カニューレという管を差す手術をしていました。成長して、体力がついた折に、その穴をふさぐ手術をすることになっていました。

小さい頃から、毎日お父さんがその管を洗浄交換し、首に包帯を巻いて、管がずれないように固定します。大変、慎重な手当です。中でも、お風呂には苦労しました。管からお湯が入ると、大変なことになります。ですから、彼女は肩から上は、お風呂につかったことがありませんでした。

小学校の修学旅行も参加が危ぶまれましたが、お父さんは学校と相談し、貸切バスの後を車で付いて回り、香織さんの面倒を見る約束で、特別に了解を得ました。

献身的な世話を受けて、香織さんは中学、高校と進学していきました。しかし、彼女が多感な年頃になるにつれ、1年中首に包帯を巻いての生活が、心に重くなっていきました。特に、夏の体育の授業は水泳です。彼女は、教室で自習するしかありません。友達がプールに入って水しぶきを上げる様子を眺めていると、深い悲しみに沈んでいきました。

いつしか彼女は、「どうして私はこんな目に遭わなければならぬのだろう」「どうしてこんな体なんだろう」と思っては、はけ口のない思いを、どんどん心にためて、閉じ込もっていききました。元気を失い、無口になっていく彼女の様子に、おばあさんの心も痛んでなりません。香織さんの苦しい胸の内を酌めば酌むほど、ど

うしてやることもできない自分にいたたまれなくなるのです。

思いあまって、おばあさんは教会の先生に、切ない思いを聞いてもらうことにしました。先生はじっと話を聞き、心中、神様に祈りながら、こう話しました。

「香織さんは、今どんなにつらいことでしょう。友達と比べれば、自分がみじめに思えて当然かもしれません。でも、人は、それぞれの境遇の中で生まれ、生きていきます。その命がくしくしやになるような思いの時もあります。そういう時は、自分が世界一の不幸せ者だとい感じます。でも、そういう人ほどかわいそうに思っていて、一緒に悲しんでくださるのが、この金光教の天地金乃神様なんです。神様は香織

さんにずっと今日まで、寄り添ってくださっているのです。彼女が苦しいように、あなたが苦しいように、神様も苦しい思いでおられるのです」

先生は、話を続けました。

「香織さんが寂しいと、神様も寂しいのです。彼女が何事にもくじけない元気で広やかな心になることが、神様のお喜びですし、期待しておられるのです。それには何よりあなたが明るく香織さんに接していかねければと思うのです。笑顔を絶やさないようにしていただけでいいですよ。笑顔を希望を導くのですよ」

先生の語る言葉をかみしめながら、おばあさんは、「この神様にすがり、神様と一緒に香織を温かく見守っていこう」と改めて思いました。

そして毎朝、今まで以上に明るい声をかけて、学校に送り出します。その声に包まれて、だんだん香織さんも、「おばあさんもお父さんも、今日も元気でね」とはにかんで、手を振るようになっていきました。

やがて無事に高校を卒業し、秋を迎えました。定期検診の結果、縫い合わせ手術の日取りが決まりました。レーザー光線を使つての手術です。待ちに待った日です。でも、不安や心配がよぎります。手術に臨む彼女を、おばあさんは勇氣付けました。「いつも神様と一緒に来たんだよ、香織ちゃん。手術も神様と一緒にだよ」。彼女は、小さくうなずきました。

手術が終わりました。麻酔から覚めたベッドの香織さんに、おばあさんとお父さんが駆け寄

り、喜びを交わしました。一時の後、香織さんが、こう口を開いたのです。「私、来年こそ海水浴に行けるかなあ」。お父さんは、「連れて行くよ。何度でも連れて行くよ」と、今までの彼女の身を思つて、たまらずそう答えました。

ところが、彼女はこう続けるのです。「弘美ちゃんも行けるかなあ。誘つて行きたいなあ」。おばあさんは、びつくりしました。弘美ちゃんとは、高校のクラスメイトなんです。香織さん同様、体が弱く、日差しの強い中での水泳授業が無理だった同級生なのです。

おばあさんは、目頭が熱くなりました。「この子は、人のことを思いやる子に育っていたんだ」。そう思った時、神様の香織さんへの深い期待をありありと感じ取りました。自分をも人

をも明るく励ましていく。そんな生き方がいよいよ香織さんに開かれるよう、おばあさんは、心新たに祈るのでした。

「いつも神様とご一緒」。家族は、今一層、そう強く思う毎日を送っています。もちろん、その翌年の海水浴は、神様とご一緒の思いの海水浴でした。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 日曜日 あさ5時40分

放送センターHP
「ここで聴く
おはなし」



「ここで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。